

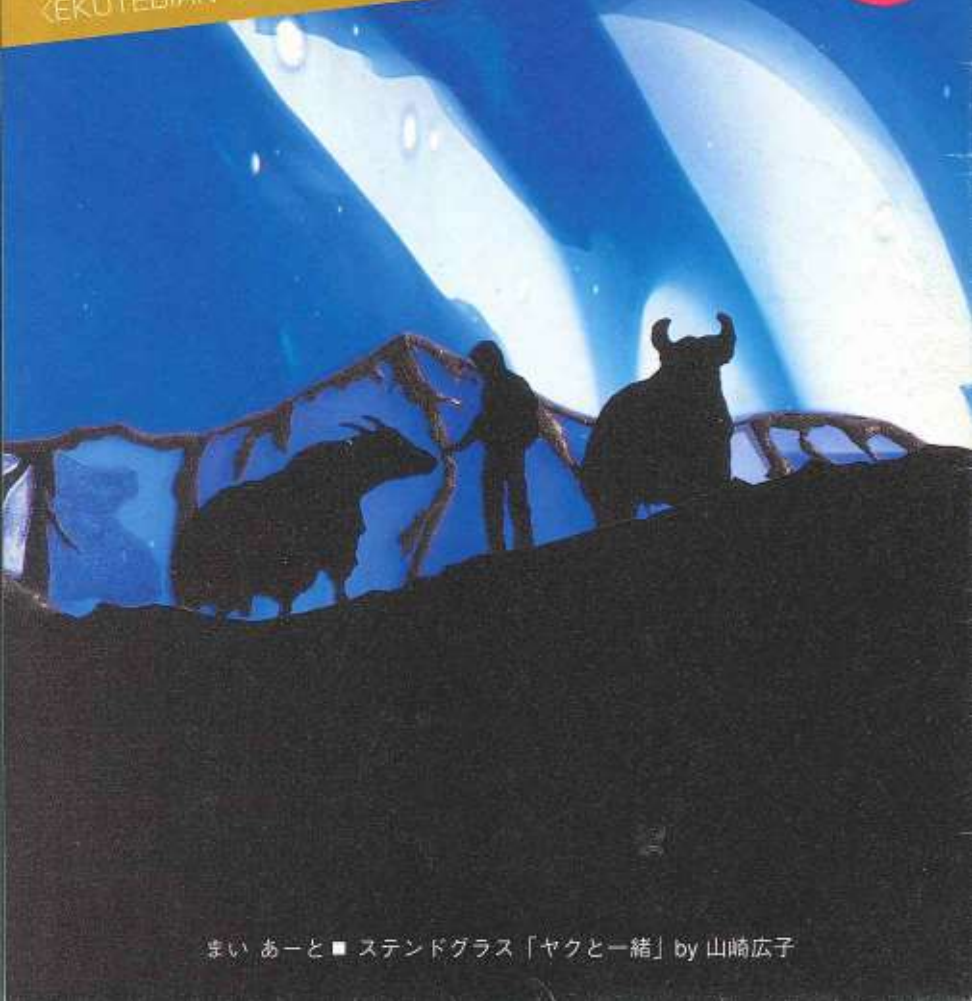
月刊

立川と語ろう 立川に生きよう

えくてびあん

〈EKUTEBIAN VOL.16 DECEMBER 1997 EKUTEBIAN〉

12



まい あーと ■ ステンドグラス「ヤクと一緒に」by 山崎広子

ガガイモ科

ガガイモ

撮影：宮城六郎 (A) 宮城直子 (B)

ガガイモの花

撮影：野嶋好雄

ガガイモは、ガガイモ科のつる性多年草で、この辺では多摩川の河原に多い。茎葉を切ると乳液が出る。葉は対生しハート形。夏に淡紫色の花を開き、果実は広皮針形で表面にいぼがあり、長さ約10cm。乾燥して口が開くと中から現われる扁平な種子には、白色の絹糸状の毛があり風によって飛ぶ。

写真は霜が降りた早朝、朝日に暖められて霜が水滴になったところを写す。

この毛はわたの代用として、針刺しや印肉に用いられる。

ガガイモ



ガガイモの花



文学碑建ちて

たちかわ天高し



これから寒さに向かって、冬帽子をかぶってジョギングに励む人や散歩を楽しむ人にとって、根川緑道に点在する文学碑の存在は格好のよりどころとなろう

去る十月十八日、たちかわ詩歌の道に二つの碑が加わった。池田澄子さん(歌人)と鈴木築水さん(俳人)のそれ。当日は雲ひとつないという形容がぴったりの秋晴で、関係者約七〇人が集い、除幕を祝った。文学の香りがする街とはまた、壮大な夢だが、その一端がここ詩歌の道にあるとすれば、わが立川にとっての文化的側面を示すものとして、貴重な存在になってくる。



当日の除幕式典は、句碑の方が歴史民俗資料館にあるので二体を合同でとり行ない、歌碑によって代表させている。写真上より祝辞を述べる文化協会会長・五十嵐栄治氏、市長・青木久氏。朗詠は齋藤漢城氏。



麦負うて
道一ぱいに
揺り来る



西雲
あえかに残り
亡母の背の
温みなつかし
武蔵野暮る、

私の立川原風景 第五回

佐伯政雄（羽衣町）



◆ 矢川の天然 ◆

昭和二十三年に羽衣町に住みはじめたのだから、私の立川歴も半世紀になる。当時、羽衣町は赤松林と雑木林、それに畑だけの静かな住宅地であった。

あの頃の矢川の清流、昔から羽衣町三丁目下が水源地のため至るところから湧水が吹出している様は、いつになってもわが心の故郷。川の中ほどにはバイカモ（水中花、私どもは筆草と呼んでいる）が、両端にはクレスンがびっしりと繁茂しており、湧水の流れはその間を遠慮しながら流れているかのようにであった。少年時代は矢川の中流の深いところで水泳したり、ヤマメ、ハヤを捕ったりして遊んだ記憶は鮮明である。太古の昔からの自然が、少しでも残っているのは、立川でもこの矢川くらいなものではないだろうか。

（フォトグラファー）